

教育機関等への義肢装具啓発プログラム 令和7年度 十文字学園女子大学 臨床看護実習 開催報告

開催日 2025年12月22日(月)

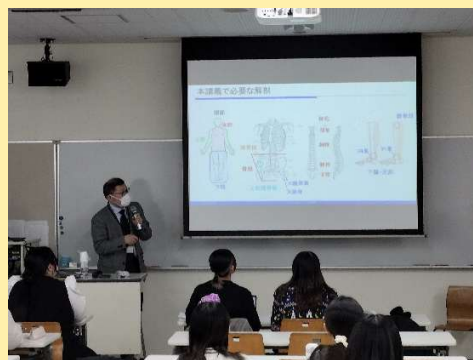
2025年12月22日(月)に十文字学園女子大学にて、教育人文学部心理学科3年生（26名）を対象に開催いたしました。生徒の多くが小学校教諭(養護教諭含む)を目指しており、将来教員として勤務をする際に義肢装具を使用する生徒と関わる可能性があります。今回は昨年に引き続き大学より依頼があり、2度目の開催となりました。

講演は、講師に国立障害者リハビリテーションセンターの星野元訓氏をお招きし、3限目(12:45～14:30)に行われました。内容は、義肢装具士による講義「①解剖の簡単な復習、②義肢装具の概要、③小児用装具の種類、④装着時の注意点・確認事項」と、2グループに分かれての義肢装具体験「装具装着体験」、「義肢装具展示品閲覧」としました。今回は、講師(星野氏)とスタッフ1名((公社)日本義肢装具士協会東日本支部 障がい者、パラアスリート及び義肢装具士の啓発に関するWG委員)の合計2名で対応しました。それぞれのプログラムについて解説いたします。

義肢装具についての講義

義肢装具士の星野氏による講義「①解剖の簡単な復習、②義肢装具の概要、③小児用装具の種類、④装着時の注意点・確認事項」を行いました。

生徒が将来教員として、義肢装具を使用する子供達と接する際に戸惑わないよう、体の仕組みを含む義肢装具の概要と、特に小児に焦点を当てた装具の種類、装着の目的や方法について講義をしていただきました。



講演の様子

義肢装具展示・閲覧



義肢装具展示の様子

教室後方スペースにテーブルを用意し、義肢装具を展示しました。最初に展示品の概要や注意事項の説明を行った後に展示品に触れていただき、生徒からの質問にも随時答えました。

実際の義肢装具に初めて触れる生徒も多く、興味を持って閲覧していただきました。

装具装着体験

教室の両端に通路と椅子を設置し装具装着と装着下での歩行を体験していただきました。装具に触れること自体初めであり、装着方法や装着させる際のコツなどスタッフが生徒に伝えながら実施しました。今回は足首を矯正する装具を装着し実際に歩行をしていただきましたが、各ベルトの役割についての質問や「スキー靴を履いている感覚に近い」などの感想を聞くことができました。



装具装着体験の様子

イベントを終えて...

今回のイベントでは、養護教諭を目指す大学生が対象であったため、就職後に義肢装具を使用する生徒と関わる可能性があることから、学生が興味を持って講演を受講していました。また、今回の講演を受講するにあたり、大学が生徒に人体についての基本を事前に授業で教えていたことで、星野氏の講演内容について学生の理解が早かった印象でした。普段の生活では義肢装具に触れる機会はなかなか無いので、義肢装具を実際に見て触れることはとても貴重であり、今後も多くの教育機関でイベントが開催できればと思います。生徒さんからの感想からもイベントがとても有意義であったと感ずることができました。

最後に、十文字学園女子大学の担当教員の方々には、事前準備から多大なご協力をいただきました。この場を借りて感謝申し上げます。

アンケート(生徒の記述感想) その1

小学生のときに同級生が足に装具をつけているのを見たことがあり、個人的にかなり興味のある分野だったので知識だけでなく実際に触ってみたり体験ができてより深く学べた。

実際に体験してみて、その精密さに驚きました。義肢装具士の方の技術力がすごいのはもちろん、これをつけている子どもの気持ちまで考え、支援につながる必要性を感じました。

義肢装具体験をして、障害の方が少しでも安心安全に装具を着用できる工夫が施されていることを実感しました。

実際に義足を体験してみて、履かせる時は足の甲を先に止めると足が底屈しずらくなった。また、履いてみて想像していたよりも歩きやすく、スキー靴を履いているような感覚になった。

想像していたよりも義肢装具の種類が多く、子どもが受け入れられるように好きなデザインにできるところがとても魅力的で、介助する側も子どもと接するときにデザインに触れながら介助を行ってコミュニケーションも増えるかなと思いました。

色々な装具に触れることができて本当に面白かった。実際に履いて歩くことができたので実際に困り感を抱えている方の気持ちを少し理解できたように感じる。糖尿病などで足が変形してしまった方が履く靴のような装具は私が履くと中がすごくゴツゴツしていて痛くてすぐに脱いでしまったが、あれしか履けないような人もいるのだと知り驚いた。

義肢装具についてテレビやインターネットで見たことがありましたが、こんなに近くで見たことがなかったので細かい工夫や配慮がたくさんありすごいなと思いました。患者さんのニーズに合わせるということをととても大切にしているのだなと感じました。

腰を痛めた時にコルセットをしていたのですが、これも装具なんだと気付きました。それぞれの体に合わせた装具は、自分の体の一部になるため、違和感があると本当に不便であるため、繊細なお仕事だなと思いました。学校外の専門職の方と連携をとる上で、このような知識があるのとなないのでは、全然違うなと感じました。ありがとうございました！

義肢・装具について種類や付け方、必要となる疾患についての理解を深めることができて良かったです。実際に装着をしてみて、装着の難しさや、しっかりはまっていないと痛かったり、かえって歩きにくいのだということも知ることができました。

偽足の人をテレビで見たことはあったけど、実際どういいう仕組みなのか、どういう効果があるのか分からなかったのが今回義肢装具の講義や体験を通してどこが固定されてるのか、それによってどんなメリットがあるのか知れて良かったです。今は意思通りに足を動かせるから装着もしやすかったけど、実際は意思通りに動かせないため想像よりもとても難しいのだろうなと思いました。

今回の講義を通して、義肢装具士について詳しく知ることができました。義肢装具士は、義肢装具のサイズが小さすぎると動きにくくなり、反対に大きすぎると踵がすり減ってしまうなど、わずかなサイズの違いが使用感や歩行のしやすさに大きく影響することを学びました。そのため、一人ひとりの足の形や動きに合わせて、適切なサイズの義肢装具を装着することが非常に重要であると感じました。実際に義肢装具を装着してみると、普段何気なく行っている「歩く」という動作が思っていた以上に難しく、少しの違和感でもバランスが取りにくくなることを実感しました。この体験を通して、利用者が安全で快適に日常生活を送るためには、義肢装具士の専門的な知識や細かな調整が欠かせない仕事であると改めて理解することができました。

義肢や装具を実際に触ったことがなかったので、装着の仕方だったり実際に歩行してみたりする経験ができて良かったです。また、義肢装具士さんとの連携が非常に重要であると感じました。

アンケート(生徒の記述感想) その2

義肢装具をつけている人を身近にお会いする機会がなかったり、学ぶ機会がなかったため、今回学び、実際に義肢を付けることが貴重な体験になりました。障害や、障害の重症度に応じてどんな装具をしようしてもらうのか、制作するのかすごく寄り添ったサポートが重要になることを感じました。そして、装具には同じものではなく、1人1つその人に適切にあった装具があることを感じました。

義肢装具や義肢装具士について学ぶことができてとても良かったです。学校現場でも、理解ある体制にしていきたいと感じました。

義肢と装具の違いやどこからどこまでを補助するものなのかで名前が変わることも知ることができて良かったです。

子どもに痛いやきついと言われると緩めたくなくなってしまうため、ベルトはしっかり閉めることの必要性を知ることができて良かったです。

義肢装具について詳しく学んだのは、初めてだったので、知らなかったことがたくさんあり、講義を聞いていて、面白かったです。実際に装具を着脱する機会も今後ないと思うので、貴重な経験ができました。学校現場で働いた時に適切な支援ができるように、今日学んだことを活かせたらと思います。

義肢装具は欠失した一部を補助するためだけでなく、変形を固定するためでもあることを学びました。介助者の負担を少しでも減らすために車椅子でも装具を着用する大切さも学ぶことができました。実際に装具をつけることができ、装着させる側が真ん中の固定テープからつけてあげることで足が真っ直ぐになるのを押さえることができることを学びました。

小児が使用する義肢装具に関して理解することができました。子どもが使用する際に少しでもQOLの向上を支えられるように知識を活用出来るようにしていきたいと思います。

義肢装具を実際に体験する機会中は中々ないので、とても貴重な経験をさせていただきました。実際に義肢装具を装着するとどのくらい制限されるのかわかったのが良かったです。

ギプスから装具へ移行することもあるとのことでしたが、完全な治癒までギプスを使用する場合と何が違うのか気になりました。

義肢や装具は無くなったものや機能を補うためという印象が強いのですが、その中でも、補助や制限、免荷というような機能もあることがわかりました。自分の手とそっくりな義手や上半身を動かすと足が前に出やすくなる装具、親しみやすいデザインの装具など、私のイメージしていた義手や装具とは変わっていて、驚きました。子どもたちが装具を使う機会は、1日の中でも学校にいる時が多いと思います。装具を使う子どもたちを見て、擦れて赤くなっていたり、使いづらそうなところがあったりというのを見つけることがあるのは、学校の教員なのではないかなと思いました。また、特別支援の先生ではない限り、正しい装具の付け方は、私も今日まで知らなかったため、学校の先生は知らないと思います。障害を持つ子どもを受けもつ他にも、急に怪我をして装具をつけざるおえないようなこともあると思います。このことを考えると、養護教諭や特支の先生以外にも義肢装具士と連携をとったり、繋がりを持つことは必要だと感じました。

祖母の妹が義肢装具士をやっていて、職業を聞いた時に何をしているのかあまりよくわかっていなかったため、講義を聞いて理解することができた。患者さんにぴったりあっている義肢や装具を作るのはとても大変そうだが、つくった時のやりがいはずいぶん感じられた。実際に体験してみると、歩きにくく、ちゃんと必要な人が使うと歩きやすくなるのだらうと思った。

疑問としては、展示のところに可愛い革の装具が置いてあったが、健側の足も同じデザインの靴を義肢装具士さんが作るのか気になった。

今回、実際に義肢装具を作っている先生方の話を聞いてとても勉強になりました。なかなか普段、気軽にお話を聞ける世界ではないので、とてもいい機会になりました。特に、実技の時に実際に義肢装具を着てみて、普段歩く時に足関節を思ったより動かしてんだなと新たな発見もあったりしました。貴重な機会をいただけて本当にありがとうございました！